

4 検討項目該当児童の学年別心的機能の発達特徴

1) 体育関係6項目

i 運動優秀児と遅滞児

ii) 運動優秀児：図 10-1

運動優秀者はそれ以外の者よりも男女ともに作業量が多く、休憩効果が高かった。その傾向は女子により多く認められ、高学年(5, 6年次)には男女差が認められた。しかし、運動優秀群の出現率は男子に高く(図 10-2)、文化としての運動に対する適応は男子優位を示すものであった。男性主導の運動文化の中で、男子と対等に運動優秀と認められる女子は、知的発達において男子より高い水準にあることを示すものであろう。

人柄について優秀児群とその他の群を比較すると、どの個性においても両群間に差がなかった。類似人柄4群間における優秀児の出現率も同様である。この結果より、運動が優秀であることと個性とは関係のないことがわかる。

精神健康度について健康度別出現率を比較した結果、両群間に差が認められた(図 10-3)。具体的には、運動優秀児は高健康度者(高+中上)が多く低健康度者(低+中下)が少なかった。とくに高健康度者の出現率が高かった。

ii) 運動遅滞児：図 10-4

運動遅滞群の性別発達曲線は運動優秀児とは逆に破線で示したその他の子たちよりも、作業量と後期増加率が低く、とくに男子の下降傾向が顕著であった。

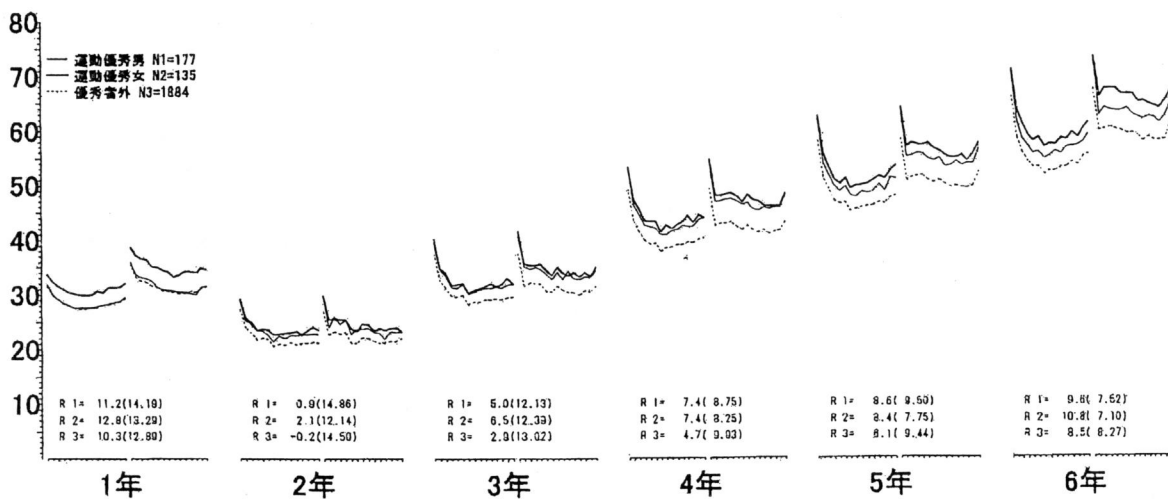


図10-1 運動優秀児の性別平均曲線

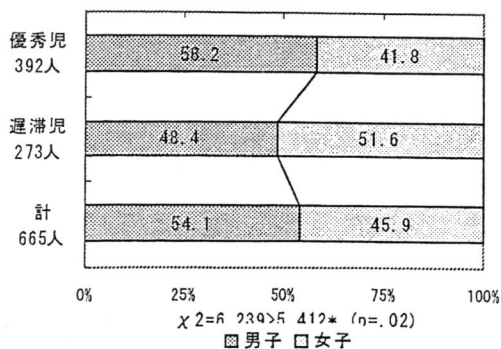


図10-2 運動優秀児と遅滞児における性差：%

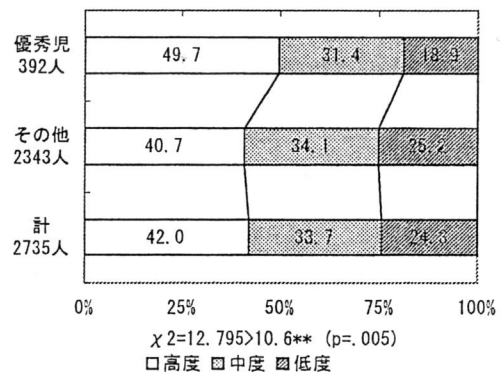


図10-3 運動優秀児の精神健康度別出現率：%

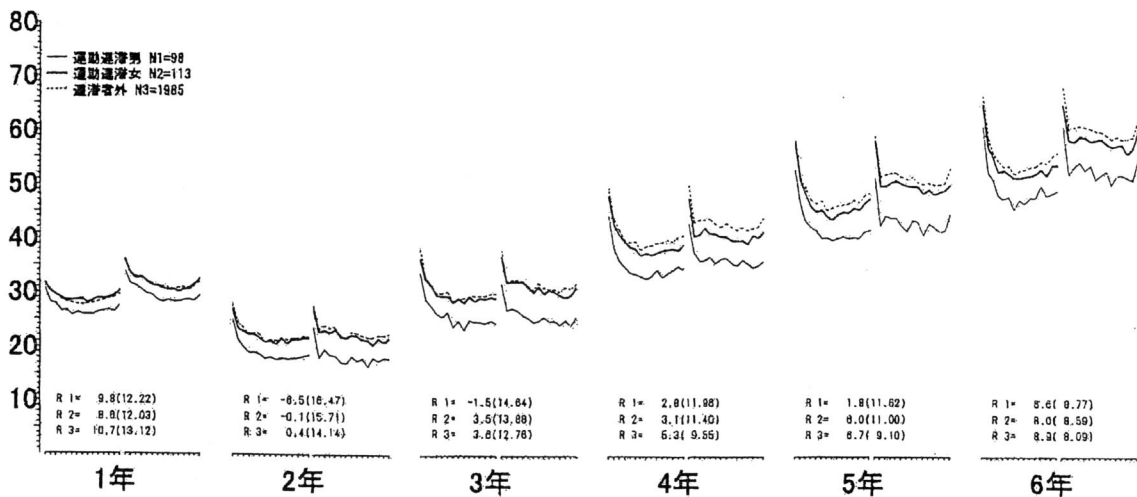


図10-4 運動遅滞児の性別平均曲線

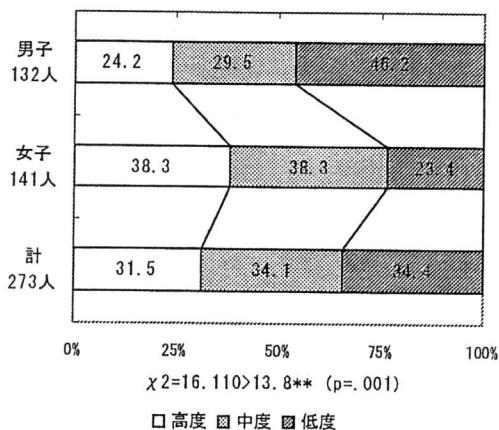


図10-5 運動遅滞児における性別精神健康度別出現率：%

この点は性別健康度分布にも表れ、図10-5に見る通り、遅滞児以外の子に比べて高度が少なく低度が多い傾向は男子により明らかに認められた。

人柄分布に関しては、運動優秀児には認められなかったが、類似人柄4群間差異が、運動遅滞児に認められた。運動遅滞児はまじめな子Ⅱ群には少なく、気ままな子Ⅳ群に多かった。

iii) 運動優秀児と遅滞児の比較：図10-6

以上の通り性差が認められるものの、明らかに運動優秀児は優秀児の、遅滞児は遅滞児の、全平均から離れた特徴が認められた。したがって図10-6は性差を無視し、運動優秀群と遅滞児群およびその他の群に分けて比較した。心的エネルギーが旺盛し、精神的健康水準の高い曲線が最上段の運動優秀児によって示された。気力に欠け、根気

不足になりがちな下降曲線が最下段の運動遅滞児によるものである。運動に秀でたり劣ったりする理由は事例によって異なるであろうが、結果として優秀児と遅滞児の個性差は関係なく、精神的健康水準の高低が対応する点は教育的意義を示唆するものであろう。生き生きと活動しながら動く力のついた子が精神的に高健康を示し、動くことに関して人から遅れをとる子が意気消沈する。発達期に伸びのびと運動して、動く力をつける体育指導が常に要求されるのではなかろうか。

運動能力は身体運動への参加により発達し、それにもなって社会性や情動等の精神的発達も促進される。こうした関係を明らかにするために、これまで運動能力とパーソナリティとの関係に関する研究が行われてきた。それらは二つの観点からアプローチされており、ひとつは運動能力の優劣によるパーソナリティの比較であり、他のひとつは、運動能力の向上にともなうパーソナリティの変化についてである。本研究においては、前者の観点からの分析が行われた。

まず、小学校5~6年生男子を対象に運動能力の優劣とパーソナリティの関係を調べた結果からは、運動能力の優れた者の方が感情の動揺が小さいことや協調性に富み社会的外向傾向が強いなどの特徴(松田,1969)が明らかにされた。

また、小学2、4、6年生男女を対象に運動能力

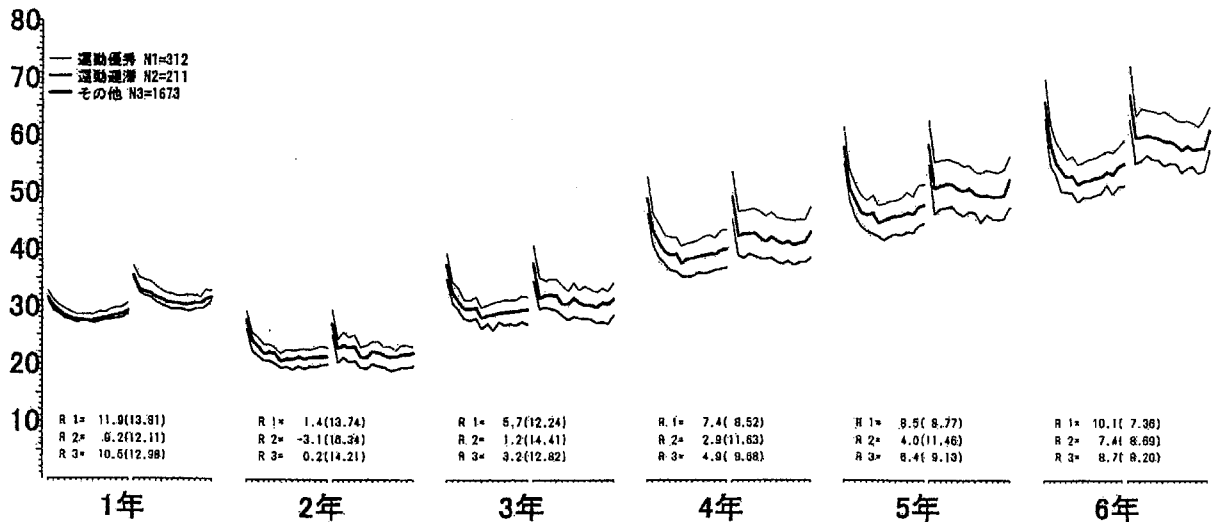


図10-6 運動優秀児と遅滞児の学年別平均曲線

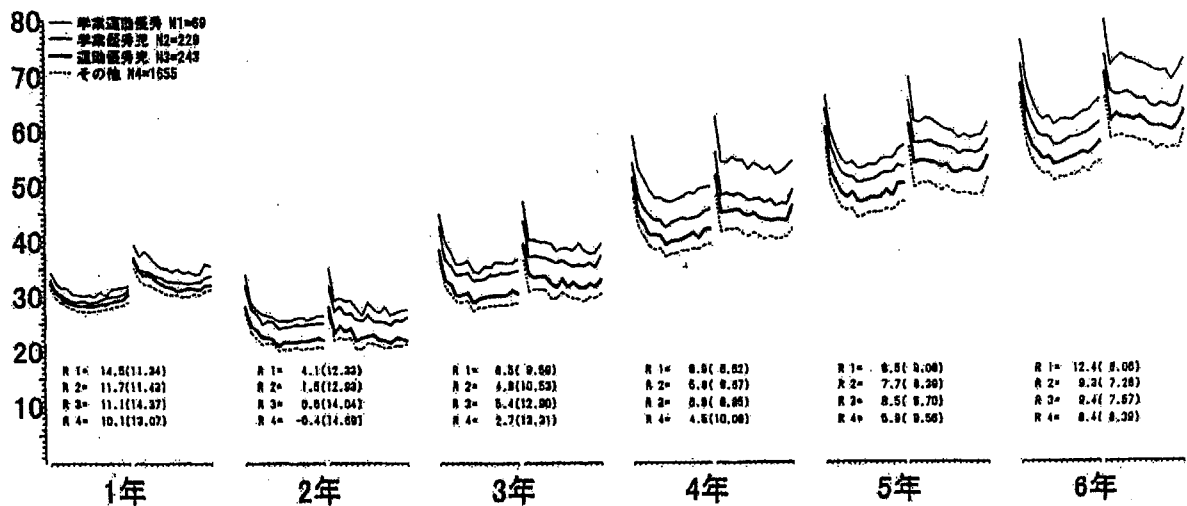


図10-7 運動学業優秀児童の心的機能の発達特徴

の優劣とパーソナリティの関連を学年ごとに比較すると、女兒の方が運動能力によるパーソナリティの差が大きく、とくに2年生で顕著であった(花田,1970)と報告されている。

これらの研究はY-G性格検査を用い、運動能力の上位群と下位群の比較を行っている。本研究においてはその他の群に比べ運動優秀児群は差がなく、運動遅滞児群は差が認められた。この結果は、運動に優れるよりもむしろ運動に劣ることが、個性に影響することを示すものである。

精神健康度と運動能力との関係を調べた研究は、これまであまり行われていない。しかしながら、

幼児を対象に両者の関係を調べた研究からは、精神健康度の高いものは低いものよりも運動能力が高い(小林,1963)ことを示している。本研究の結果とこれらを合わせて考えると、幼少期に運動に優れることは精神的健康度と深く関わっていることが窺える。

iv) 学業優秀児と運動優秀児の比較特徴

近代社会には知的重視の長い歴史があり、附属学校が進学校と評価される中で、附属学校における学力と運動の関係がどうであるかを検討した。比較の方法として、学業、運動ともに優秀な学業

運動優秀児群と学業優秀児群、運動優秀児群の3群間の比較を試みた。

図10-7に見られるとおり優秀児群は一般児童群よりも上位に位置し、中でも学業・運動双方優秀児群の水準が群を抜いて高かった。ついで学業優秀児群、3番目に運動優秀児群が高く、この関係は全学年を通じて認められた。この結果は、児童期に学業なり運動が優れていることは、心的エネルギー水準の高さ（作業量大）と精神的健康水準の高さがあって成立することを示すものである。こうした関係は、人柄類型別分布には3群間の差はなく、生得的な個性と学業や運動との関連が認められないことから理解できる。

内田・クレペリン精神作業検査を用いた優秀児研究は少ないが、4~6年の児童を対象に優秀児と普通児の曲線を比較した研究がみられる。対象者が10名と少ないが、優秀児の方が精神作業において質量ともに優れていた（森,1971）。本研究の結果は対象者数も多く、優秀者の特性を一般化するものであると考えられる。

一方、精神健康度上には3群間に明らかな差が認められ、学業運動双方優秀者の70%が高+中上度群であり、低+中下度群は僅か2.5%であった。一般群を含めて高健康度群の出現率は学業運動双方優秀者>学業優秀者>運動優秀者>その他の順に高く、低健康度群はその逆であった。

学業優秀児群と運動優秀児群間、および運動優秀児群と一般群間には健康度分布に差は認められなかったが、学業優秀児群は一般群よりも高健康

度を示した。

学業、運動ともに優秀である児童が精神健康度も高いことは、児童期における両者の意味を考える一つのヒントとして捉えることができよう。身心ともに健康な子として育つために、児童期はのびのびと遊びながら学ぶことが大切であり、勉強と運動の両立が求められる所以もこうした理由によるところが大きい。

ii 身体大きい子と小さい子

担任の目からみて、卒業年次にとくに身体大きな子と小さな子の比は311:249人、1クラスに置き換えると大きな子が4人、小さな子が3人強であった。発達期に平均から外れて大きい、あるいは小さいことは、自我形成や行動傾向に影響を及ぼす場合がある。本項では、肥満や病虚弱とは別に身体の大別UK分析を試みた。

i) 人柄群別分布：図11-1

身体的大小と人柄群別分布に差は認められなかったが、クレッチメルによる躁鬱気質に肥満型の多い指摘があるので、3-1ほがらか、3-1dじっくり、3-2なごやか型の3型をひとまとめにしてみると、図11-1より身体大きい子は小さい子と比べて、60:40の比で躁鬱型に多いことが認められた。

ii) 精神健康度分布：図11-2

大きな子の過半数の51.4%が高+中上度、20.9%が中下+低度であったのに対して、小さな子は38.2%:33.3%であった。経済成長期の流行語にある「大きいことは良いことだ」の一言がデ

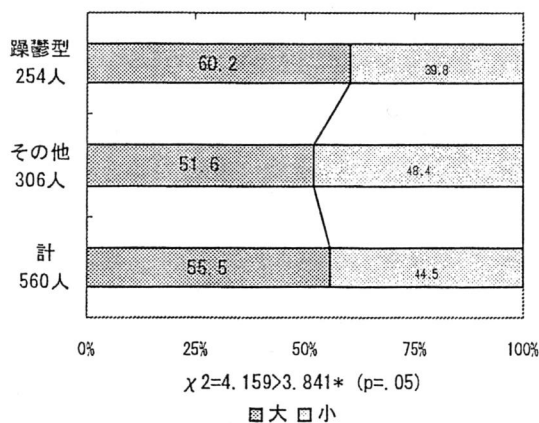


図11-1 身体的大小における躁鬱型出現率:%

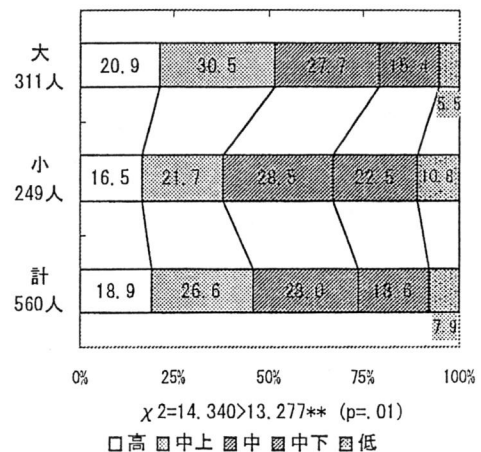


図11-2 身体的大小における精神健康度別出現率:%

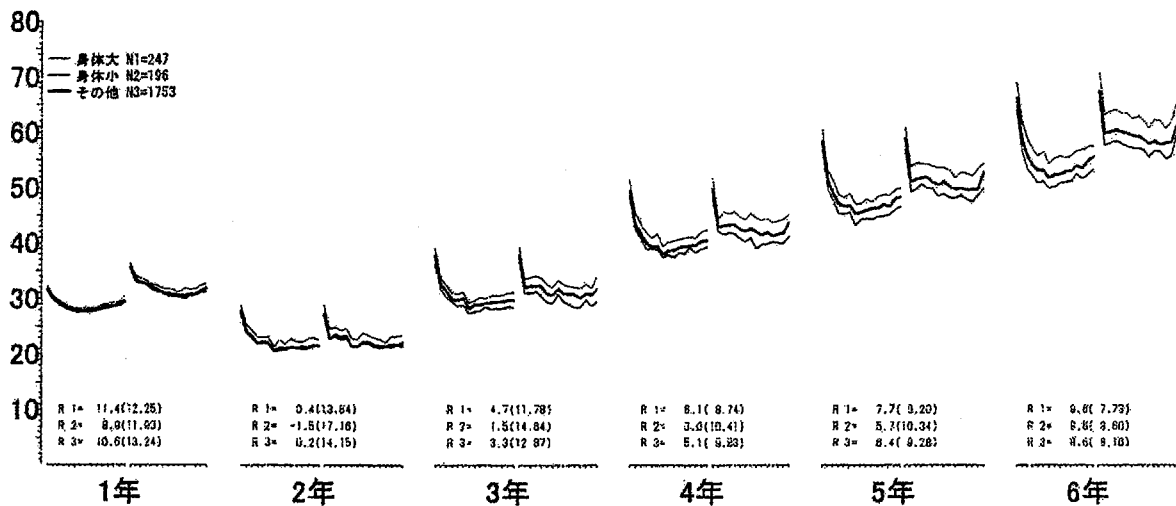


図11-3 身体の大小における学年別平均曲線

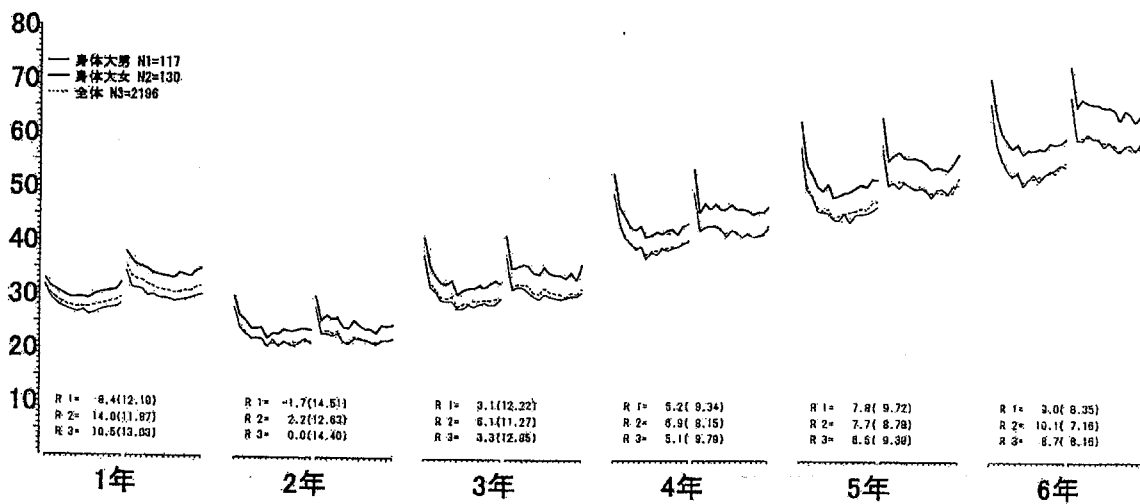


図11-4 身体の大いなる児童の性別学年別平均曲線

一タ上で生きていた。

iii) 平均曲線：図 11-3

太線の普通の子をはさんで、大きな子の曲線が上位、小さな子が下位に位置していた。小さな子の発達遅滞は精神面に影響を与え、心的エネルギー水準（作業量の低さ）と精神健康度（後期増加率の低さ）の低迷とともに、4年次までの下降傾向に示される気力・粘り不足が目立った。救いは、5・6年次の曲線傾向が普通の子の経過に接近し、下降から弯曲に転じた点であろう。

iv) 男女差

身体の大いなる子により顕著に表れていた（図 11-4）。すなわち、男子は普通の子と同一経過をたどり、女子は大きい子の休効と作業量の優位が認められた。一方、小さい子（図 11-5）には大きな差は認められなかったが、普通の子よりも作業量がやや少ないほか、4年次までの女子優位の休効が5年次で男子優位に転じる傾向を示していた。社会的評価と平行して「大きいことは良いこと」とその逆は男子よりも女子に表れ、男子への影響は少ないと言えよう。

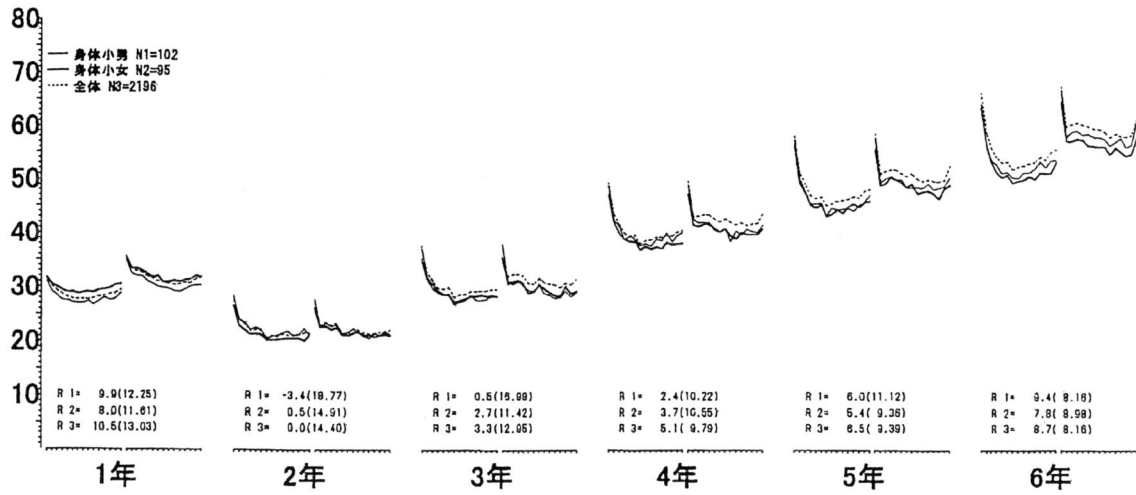


図11-5 身体の小さな児童の性別学年別平均曲線

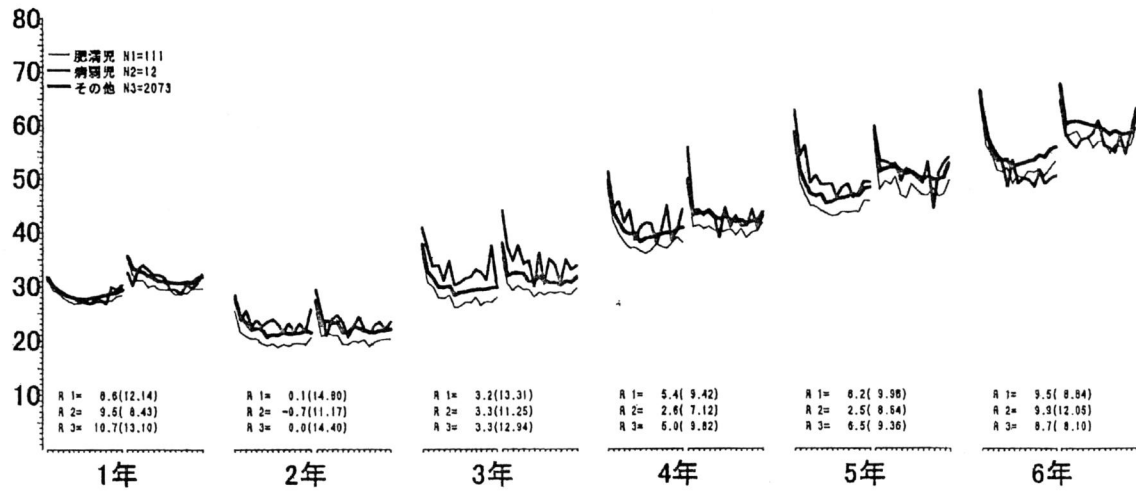


図12-1 肥満と病虚弱児童の学年別平均曲線

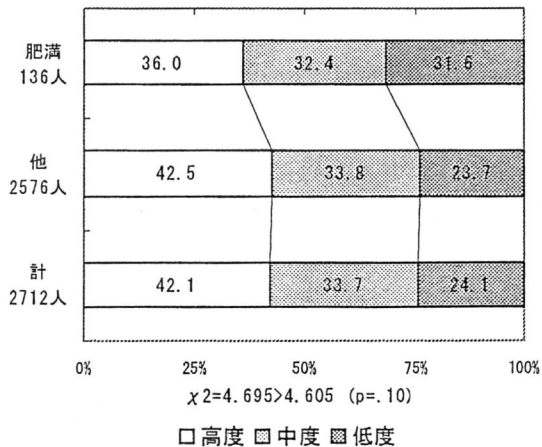


図12-2 肥満児における精神健康度出現率：%

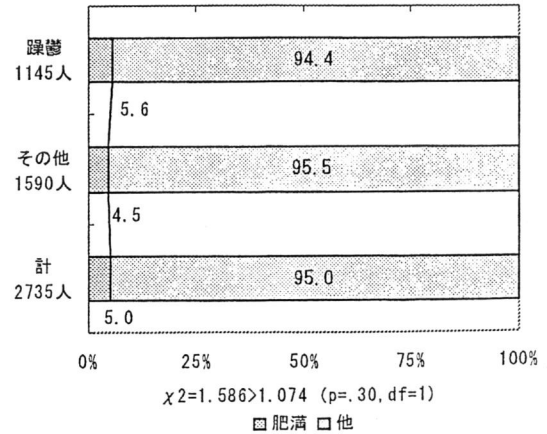


図12-3 肥満児における躁鬱型出現率：%